

# 大学生における対人恐怖心性

## —聴覚投映法による検討—

松川 春樹<sup>1)\*</sup>, 池田 忠義<sup>1)</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学生相談・特別支援センター

### 1. 問題と目的

#### 青年期における対人恐怖心性

学生相談において学生と関わっていると、人と接するのが怖くて、外面的には何とか取り繕って他者との関わりをやり過ごしたり、極力他者と関わらず一人で過ごすようにしたりしている学生に出会うことが少なくない。これは中学校や高校の学校臨床においても比較的良好に見られ、青年期に特有のものと考えられる。その中でも大学生においては、親から離れて一人暮らしを始めることや、複数のキャンパスや研究室、部活動・サークル、アルバイトなど活動範囲が広く多様になること、全国から集まった自分と同水準以上の能力を持った同年代の人々と接すること、就職活動を含む社会参加の課題に取り組むことなどが重なり、対人場面での不安や悩みが表面化しやすいと考えられる。また、これらをきっかけにストレス症状や不適応、不登校、進路に関する悩みなどの問題が生じてくることも多く、学生相談ではその適切な理解や支援を行うことが求められている。

このような青年期に特有の心の在り様は、対人恐怖心性としてこれまで数多くの研究で取り上げられてきた。堀井・小川(1997b)は対人恐怖心性を構造の観点から対自的要因によるものと対他的要因によるものに分類し、中学生、高校生、大学生を対象とした質問紙調査により発達的变化を検討している。その結果、中学生では対人恐怖心性の構造が自他未分化であったものが、年齢とともに徐々に自他の要因に分化していく過程を見出している。永井(1998)も、自己意識の

観点から対人恐怖心性を捉え、中学生、高校生、大学生に渡る発達的变化を検討した結果から、対人恐怖心性は青年期における健全な自己意識の分化、健全な成長過程として捉えられる面があることを示している。その一方で、このような心の在り様が過度に強まり対人恐怖症を発症する例もある。DSM-5(American Psychiatric Association, 2013/2014)によると、対人恐怖症は「社会的交流において、自己の外見や動作が他者に対して不適切または不快であるという思考、感情、または確信によって、対人状況についての不安および回避が特徴である文化症候群」と定義される。永田(1992)も「対人恐怖症とは、対人場面で不当に強い不安や緊張を生じ、その結果、人からいやがられたり、変に思われたりすることを恐れて、対人関係を避けようとする神経症である」とした上で、近年の概念拡大に言及し、「今日では、人みしり、気づかいなどの正常範囲のものから、恐怖症段階にとどまる神経症水準のもの、境界例的な重症のもの、分裂病(統合失調症)の一部とみなされるものまで、幅広い病態水準を包含する一つの症候群と考えられるようになってきている(括弧内は筆者が補足)」と述べている。このように、対人恐怖心性は健全 - 病理のスペクトラムとしても捉えられるものである。

#### 対人恐怖心性と他の特性との関連

永井(1998)によると、対人恐怖心性は、①対人状況における態度や行動の問題、②関係的自己意識の問題、③内省的自己意識の問題、という3つの次元で捉

\*) 連絡先: 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学学生相談・特別支援センター haruki.matsukawa.c8@tohoku.ac.jp

えられるという。①には集団にとけこめない、対人場面での気恥ずかしさなどが、②には他者の評価や視線が気になるなどの悩みが、③には不安や劣等感の強さなどがそれぞれ含まれる。この3次元について、永井はFenigstein & Venable (1992)による自己意識の構造、つまり、社会的不安、公的自己意識、私的自己意識との類似性を指摘している。この中でも、私的自己意識より公的自己意識の方が、対人恐怖心性との間に強い正の相関が認められるという点で研究者間での一致が見られている(堀井, 2001; 堀井・小川, 1996)。「対人」恐怖心性という字義通りに考えても、自分の内面や感情など、他者から直接観察されにくい自己の側面に注意を向ける私的自己意識よりも、自分の服装や他者に対する言動など、他者から直接観察できる自己の側面に注意を向ける公的自己意識の方に強い相関が見られるというのは、ごく自然なことと考えられる。

対人恐怖心性の対人的な側面を扱った研究としては、例えば、相川ら(2007)は大学生を対象とする質問紙調査により、社会的スキル不足と対人不安の間に正の相関が見られたことを示している。渡部(2003)は専門学校生を対象とした質問紙調査により、自己呈示に対する動機づけの高さと、効力感の低さが対人不安の喚起に関連することを明らかにしている。社会的スキルが低いと自己呈示における効力感も低まると考えられ、相川ら(2007)の知見と符合する。厳密に言えば対人不安の方が対人恐怖心性よりも広範な概念であるが、対人恐怖心性においてもこれら2つの研究の知見があてはまる可能性が高いと考えられる。益子(2009)は高校生を対象とした質問紙調査により、対人恐怖心性と過剰適応傾向の下位尺度「自己抑制」との間に中程度の正の相関が見られたことを報告している。この自己抑制は「自分自身が思っていることは、外に出さない」などの項目から成っており、自己呈示との相関が推測される。金子ら(2003)は高校生を対象とした質問紙調査により、対人恐怖心性と登校拒否関連性格尺度(本城ら, 1999)における消極・非社会的因子との間に強い正の相関を示し、堀井(2014)は大学生を対象とした質問紙調査を行い、対人恐怖心性が大学生不登校傾向尺度(堀井, 2013)における登校

回避行動および登校回避感情に正の影響を与えることを示している。このように、対人恐怖心性が高い人は社会的スキルが十分に身につけていないと自ら感じており、自己表現や対人関係において抑制的・消極的さらには回避的になる傾向があると考えられる。

対人的側面の中でも特殊な面として、対人恐怖心性と妄想的観念の関連についても検討が行われてきた。金子ら(2003)は、「他者の何でもない仕草を自己に被害的に関連づける傾向(金子, 2000)」である自己関係づけと、対人恐怖心性に中程度の正の相関が見られたとしている。高倉・横田(2010)は大学生を対象に質問紙調査を行い、対人恐怖心性と否定的な妄想的観念の間に中程度の正の相関が見られたことを報告している。永田(1992)は対人恐怖症の中に「関係妄想性を帯びた重症例」があることを指摘しており、特に先述の健常 - 病理のスペクトラムにおいて病理側に傾くほど対人恐怖心性は妄想的観念と近似する可能性がある。

対人恐怖心性と内省的自己意識や私的自己意識、およびそれに関連するパーソナリティとの関連を検討する研究も行われてきた。岡田・永井(1990)は中学生、高校生、大学生を対象に「対人状況における態度や行動」「関係的自己意識」「内省的自己意識」と自己評価の関連を調査した結果、高校生男子を除き、3側面すべてで弱い～中程度の負の相関が見られたことを示している。大学生で対人恐怖心性の高い人は、否定的な他者評価をあまり吟味することなく受け入れる傾向が見られたという報告もある(調・高橋, 2002)。対人恐怖心性と自尊心の間に強い負の相関が(調・高橋, 2002; 堀井・小川, 1996)、劣等感との間に中程度の正の相関が見られたことを示す研究もある(堀井・小川, 1997a; 堀井, 2006)。また、清水・海塚(2002)は大学生を対象に調査を行い、対人恐怖心性と自己愛傾向に弱い～中程度の負の相関が見られたことを報告している。自尊心は基本的には対自的な肯定感であるのに対し、自己愛は対他的な優越感にもとづくものであり(向井, 2001)、これらの両方が対人恐怖心性と関連していると考えられる。

この自己愛とも関連し、幼少期の対人関係、特に親子関係が対人恐怖心性に与える影響について臨床的見

地から指摘され、研究もなされてきている。稲垣(2007)は、自己愛的甘えと「関係的自己意識」の間に弱い～中程度の正の相関が見られたことを示し、自己愛的な甘えが満たされず自己愛が傷つけられる体験と対人恐怖心性の発生を結びつけて考察している。久保(2000)は、過去の父親・母親との関係認識(質問紙法)と回想動的家族画法(投映法)から、異なる水準で親子関係像を測定し、対人恐怖心性との比較を行った。その結果、対人恐怖心性の高い人は、質問紙では母親に対して親密さも不信も強いという二面性を示し、家族画では交流し難い両親像を描いた。このことから、久保は対人恐怖心性を愛着の不安定型として位置づけられると考察している。この不安定型にはアンビバレント型と回避型が含まれており、対人恐怖心性が高い人の対人場面での二面性や回避傾向(向井, 2001)とも一致している。

### 対人恐怖心性と投映法<sup>1)</sup>の関連

ここまで質問紙法による研究を中心に概観してきた。実際の相談場面でを行う心理アセスメントでは質問紙法だけではなく投映法も用いられることが多いが、投映法による対人恐怖心性の基礎的な研究はあまり見られない。これは質問紙法に比べて構造化が緩い投映法は反応の自由度が高く、数量的分析よりも質的分析に重きが置かれる傾向があるためと考えられる。大学生を対象とする基礎的研究をいくつか見て行くと、ロールシャッハ法においては顔反応が対人不安の指標とされており、相河(2004)は、対人恐怖心性の高群が低群よりも顔反応および人間運動反応(M)や動物運動反応(FM)が高かったことから、「対人恐怖心性の高い者は外界に主観的なイメージを投影しやすく、そのため、他者との適切な距離を取りにくい」と考察している。永井(1998)も対人恐怖心性の高群が低群よりも人間運動反応が多いことを認めたが、内的資質としてその肯定的側面に注目している。また、対人恐怖心性の程度は人間に関連した反応内容や、対象間の交流など対人関係に関する変数の差としては現れにくい(神谷, 2000)。木村(1983)は主題統覚検査(Thematic Apperception Test; 以下TATと略記)において語られた物語を主題や他者との関わりの観点

から図版ごとに分析し、対人恐怖心性との関連を検討している。その結果、対人恐怖心性の高群は低群に比べて、自我同一性を確立しようとし、他者に対して一個人として関わろうとしながらも、「対人距離が不適切で抜き差しならないコミットかさもなければ引きこもるという対人パターンを生じる」という。しかし、これ以後の研究は見られず、対人恐怖心性が高い人に特徴的な反応といえるのか、その反応を分析・解釈する視点として妥当であるかなど、検討すべき点が多く残された状態といえよう。

ロールシャッハ法やTATが視覚を介した投映法であるのに対し、Skinner(1936)が最初に考案した聴覚投映法(Auditory Projective Test; 以下APTと略記)はその名の通り聴覚を介した投映法である。対人恐怖心性を測定する質問紙の1つである対人恐怖心性尺度II(堀井, 2006)の項目を参照すると、対人恐怖心性には他者の表情や視線、および自己の表情や視線、臭いなどの非言語や視覚を介したコミュニケーションに関する「おびえ」と同時に、他者からの批判や、自己の発言などの言語や聴覚を介したコミュニケーションに関する「おびえ」も含まれている。このため、視覚を介した投映法だけではなく、聴覚を介した投映法から対人恐怖心性の特徴を検討することには意義があると考えられる。松川(2015)は独自の聴覚刺激を作成して、大学生を対象にTATのような物語作成の手続きによるAPTを実施し、対人恐怖心性がAPTの反応における形式面および認知面にどのように表れるか検討している。その結果、形式面では、対人恐怖心性が高い人ほど物語の登場人物に強く同一化し、聴覚刺激の追加提示を求めず、複数の物語を語ることもなかった。刺激に台詞が含まれているAPTにおいては、登場人物の台詞を交える形で同一化して物語を展開することはTATほど珍しいことではない(松川, 2011b)。そのため、この結果は、対人恐怖心性の高い人ほど質的には刺激にも反応にも強く関わるのに対し、量的には必要以上に関わらない姿勢が反映されたものと考えられた。認知面では、対人恐怖心性が高い人ほど、対人場面とは関連の薄い刺激の要素を取り込み、対人刺激の弱い場面でも刺激が設定する空間に対しても限定的に関わっていた。これらの点は回避傾向

の視点から解釈可能と考えられた。また、対人恐怖心が高い人ほど物語の中で触覚情報を冷たく不快なものとして語ることが多く、親密な対人関係に対する否定的な感覚の視点から解釈された。このように対人恐怖心性とAPTの形式面および認知面の関連は明らかになったが、対人恐怖心性がAPTの内容面にどのように表れるかはまだ明らかにされていない。

## 本研究の目的について

本研究は、対人恐怖心性がAPTにおける反応の内容面にどのように表れるかを明らかにすることを目的とする。先行研究から、対人恐怖心が高い人には、①他者への被害感や不信感、②自尊心や自己愛の低さ、③両親に対する否定的あるいは両価的感情が予測される。これらを本研究で用いるAPTの指標にあてはめると以下の仮説が立てられる。

対人恐怖心が高い人ほどAPTにおいて、

仮説1：「他者に向ける感情の性質」が否定的である。

仮説2：「自己に向ける感情の性質」が否定的である。

仮説3：「父親（的人物）に向ける感情の性質」が否定的である。

仮説4：「母親（的人物）に向ける感情の性質」が否定的である。

なお、APTにおける「自己」とは、物語において被検者が特に同一化した登場人物、つまり主人公を指す。この点についてはTATにおいても賛否両論あるが、本研究は「被検者が強く同一化している人物の特徴的な面は、被検者自身のそれでもあろう（鈴木、1997）」という視点に立つ。APTにおける「他者」は「自己」以外の登場人物を指し、1つの物語で複数登場することもある。また、本研究では、これらに加えて他のAPT指標についても対人恐怖心性との関連を探索的に検討する。

## 2. 方法

### 質問紙調査

実施期間 2011年7月～9月

対象者 大学生・大学院生392名（男性189名、女性

197名、性別不明6名、平均年齢19.43歳（ $SD = 1.34$ ）を対象とした。

**質問紙** 対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井、2006）を用いた。堀井は対人恐怖心性の本質が「恥」から「おびえ」へと変遷してきていることを鑑み、「おびえ」の心性に基づく現代的な対人恐怖心性を測定する本尺度を作成している。5つの下位尺度（劣等恐怖、被害恐怖、自己視線・醜形恐怖、孤立・親密恐怖、加害恐怖）を含む25項目から成り、堀井に準じて各項目について「非常にあてはまる」～「全然あてはまらない」の7件法で回答を求めた。

**手続き** 大学の講義終了後の時間に調査協力を依頼した。個人情報取り扱いについて説明した上で、実験への協力を呼びかけ、協力可能な者には質問紙の所定欄に名前と連絡先を記入してもらった。

### 実験

実施期間 2011年10月～12月

**実験参加者** 質問紙調査において実験に協力可能と意思表示をした、大学生・大学院生63名（男性22名、女性41名、平均年齢19.42歳（ $SD = 1.57$ ））を対象とした。

**聴覚刺激** 松川（2015）と同じ16刺激を用いた。葛藤を喚起しやすい会話場面を中心とする「音声刺激」は前半に、葛藤をあまり喚起しない環境音や物音を中心とする「非音声刺激」は後半に配置された、変則的な提示順序となっている（表1）。これは「第1刺激として適切な音声刺激がなかったため（松川、2015）」であり、本研究でもこの提示順序を踏襲するが、今後改良が望まれる。

**手続き** 実験室において、実験者と参加者は机を挟んで90度で向かい合って座り、APTを実施した。坪内（1997）によるTATの手続きを参考に、「これからスピーカーを通してあなたにいろいろな人や場面の音を聞いていただきます。その音を聞いて思い浮かぶ物語を作って話して下さい。その場面の中の人、今何を感じ、どうしているのか、その場面の前にはどんなことがあって、その場面の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて話して下さい。

ちょうど物語の一場面が先にできてしまっていてそれに

表1 聴覚刺激の提示順序と内容

刺激	内容
1	都会の交差点で車や人々が往來する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所で、男性A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性B「ああ、少々てこずったがね」、男性A「ふん、さすがだ」、男性B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ!?', 女の子「だって…」, 女性「もうしないって約束する?」、女の子「はい」。
4	土砂降りの雨の中、1台の車が通り過ぎ、女性「やっぱマズイって…」, 男性「お前、今さら何弱気になってんだよ、もうやるしかないって分かてるだろ? さあ、行くぞ!」、女性「あ、ちょっと待ってよ…」。
5	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですかねの?ちゃんと一言言わなきゃ分かんないだろ?」、男の子「別にすねて何かないよ…」, 男性「言いたいことあるんだったらちゃんと一言いなさい?」、男の子「うん…」。
6	大勢の客で賑わっているレストランで、女性A「…そっかあ…そりゃ辛かったね…」, 女性B「うん…」, <携帯電話の着信音>, 女性A「あ、ちょっとごめん」, <携帯電話に出る>, 女性A「あ、はいはい、どうしたの? ……え、うっそお! ? …へえーうん…うん, うん分かった! じゃあ明日ねー」, <ブランク>。
7	静かな場所で、男性A「お前は何をしたのか分かてるのか!?', 男性B「はい、でも、あれは…」, 男性A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって…お前どうするつもりなんだ!?', <ブランク>。
8	高架下で、女性A「それよりさ、どこ行こっか?」、女性B「どっか遠いところ…どうせなら海がいいな」。
9	静かな場所で、女性A「あ、私こっちだから」、男性「あ、うん、じゃあねー」、女性B「またねー!」、女性A「また!」、<足音>。
10	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸り。電気スイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音。
11	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約20秒後)女性が2度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
12	静かな地下の廊下を歩く2人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。
13	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
14	静かな場所で、衣擦れの音が聴こえる。
15	静かな場所で、心拍が聴こえる。
16	ひぐらしや鳥の鳴き声と沢音が聴こえる。

注：実験参加者に必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない。網掛け部分は音声刺激、それ以外は非音声刺激である。

短いお話をつけなくてはならなくなった小説家みたいな気持ちで、頑張ってみて下さい。音は全部で16個あります。これから1つずつあなたに聞かせていきますから、1つの音に対して1つずつお話を話して下さい。音をもう一度聞きたいときには遠慮なく仰って下さい」と教示した。なお、後で詳しく分析するため、参加者の了承を得た上でICレコーダーにより実験の様子を録音した。

**倫理的配慮** 最初に実験の概要や個人情報保護に関して説明し、インフォームドコンセントに十分な配慮を行い、実験参加同意書に署名を得た上で実験を開始した。また、実験中に体調に変化が生じたときにはいつでも実験を中断・中止できることを伝えた。実験終

了後には感想や体調について聴き、実験に対する質問を受け付けるなどディブリーフィングを簡潔に行った。さらに、後になって気分や体調に異変が生じた際の相談先について情報提供した。なお、本研究は事前に本学教育学研究科における研究倫理委員会の承認を得ていた(承認ID: 11-2-001)。

**分析方法** APTにおける反応の内容面に関して、TATで用いられる指標やAPT独自の指標により評価を行った(表2)。具体的には、まず、「主題の性質」「自己の内界に向ける関心」や「自己に向ける感情の性質」「他者に向ける関心」「他者に向ける感情の性質」「父親(的人物)に向ける感情の性質」「母親(的人物)に向ける感情の性質」「導入人物の性質」「背景音に対

する情緒的意味づけの性質」「結末の性質」は「否定的（弱い）／どちらでもない／肯定的（強い）」の3件法で、残りの指標は「ない／ある」の2件法で評定した。次に、「否定的（弱い）／どちらでもない／肯定的（強い）」を「-1／0／+1」に、「ない／ある」を「0／1」に変換し、指標ごとに音声刺激8個分、非音声刺激8個分の評定を合計し、その値を分析対象

表2 APT指標の内容

指標	内容
他者に向ける感情の性質	主人公以外の人物への親しみや信頼あるいは怒りや不信のバランス
自己に向ける感情の性質	主人公の自尊心や自己肯定感あるいは罪悪感や自己否定感のバランス
父親（的人物）に向ける感情の性質	父親やそれに近い人物への親しみや信頼あるいは怒りや不信のバランス
母親（的人物）に向ける感情の性質	母親やそれに近い人物への親しみや信頼あるいは怒りや不信のバランス
主題の性質	物語の主題における幸福や社会的成功あるいは対象喪失や犯罪などのバランス
自己の内界に向ける関心	主人公の思考や感情などの内的過程の描写の多少
他者に向ける関心	主人公以外の人物に関する描写の多少
刺激外の人物の導入	導入人物（刺激中には存在しない物語の登場人物）の有無
主人公の導入	導入人物の主人公化の有無
導入人物の性質	導入人物への親しみや信頼あるいは怒りや不信のバランス
人物設定の明細化	登場人物に対する外見や社会的所属、性格などの明細化の有無
動物の導入	刺激中に存在しない動物の導入の有無
背景音に対する情緒的意味づけの性質	人物の背景に流れる環境音への親しみや安心あるいは嫌悪や不信のバランス
曖昧な結末	漠然とした結末の有無
結末の性質	主人公にとっての物語の結末における安心や達成あるいは不安や失敗のバランス
攻撃的内容	人物や物に対する攻撃的行動や強い怒りの描写の有無
損傷内容	人物や物の傷つきや強い悲嘆の描写の有無
自己体験への言及	参加者自身の過去の体験に対する言及の有無
刺激／物語に対する主観的印象	物語作成の課題からは離れた、刺激あるいは物語に対する主観的・情緒的語りの有無

注：下線部はAPT独自の指標を示す。

とした。なお、音声刺激と非音声刺激では刺激と反応に質的な差が認められているため（松川，2011a, 2012）、本研究では別々に評定値を算出した。

### 3. 結果

#### APTの評定値算出

反応ごとに筆者を含む臨床心理士2名で評定を行った。評定が一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、音声刺激8個と非音声刺激8個に分けて評定値を算出した。音声刺激および非音声刺激における評定値の平均と標準偏差を表3に示す。なお、「主人公の導入」は音声刺激において該当する反応がなかったため、非音声刺激のみで検討する。また、「動物の導入」や「自己体験への言及」、「主観的印象（対刺激）」、「主観的印象（対物語）」は8刺激を通して1回以上該当した参加者数が10名に満たなかったため、本研究では分析対象から除外した。

表3 APT指標の平均と標準偏差（SD）

APT指標	音声刺激		非音声刺激	
	平均	SD	平均	SD
他者に向ける感情の性質	-0.63	2.82	0.05	3.08
自己に向ける感情の性質	-0.38	1.13	0.13	1.07
父親（的人物）に向ける感情の性質	-0.19	1.15	0.38	1.01
母親（的人物）に向ける感情の性質	-0.83	0.89	-0.06	0.84
主題の性質	-3.84	3.17	-1.46	2.73
自己の内界に向ける関心	-1.35	2.71	-2.49	3.24
他者に向ける関心	1.92	3.16	-2.27	3.83
刺激外の人物の導入	4.11	1.45	3.97	1.90
主人公の導入	—	—	2.00	1.34
導入人物の性質	-1.08	1.62	0.25	2.14
人物設定の明細化	4.01	1.56	3.48	2.31
背景音に対する情緒的意味づけの性質	-0.44	0.50	-0.81	1.49
曖昧な結末	4.16	2.29	4.71	1.93
結末の性質	0.43	2.66	1.00	3.09
攻撃的内容	1.33	0.80	0.73	0.95
損傷内容	0.51	0.56	1.17	1.33

n=63、注：「主人公の導入」は音声刺激では出現しなかった。

## 対人恐怖心性の得点算出

堀井（2006）に準じて、5つの下位尺度および合計得点を算出した。平均と標準偏差を表4に示す。下位尺度の劣等恐怖が相対的に高く、自己視線・醜形恐怖や孤立・親密恐怖、被害恐怖が相対的に低かった。本研究ではこれをふまえた上で合計得点を分析対象とする。

表4 対人恐怖心性尺度Ⅱの平均と標準偏差

	平均	標準偏差
対人恐怖心性	72.87	27.43
劣等恐怖	19.11	5.67
被害恐怖	13.38	8.18
自己視線・醜形恐怖	12.06	6.64
孤立・親密恐怖	13.02	7.09
加害恐怖	15.30	5.38

$n=63$

## APTと対人恐怖心性の関連の検討

APTの評定値と対人恐怖心性尺度Ⅱの合計得点についてSpearmanの順位相関係数を算出し、無相関検定を行なった結果、以下の有意な相関が認められた(表5)。まず、仮説検討に関わる指標では、「他者に向ける感情の性質」は音声刺激と非音声刺激の両方において中程度の負の相関が認められた(順に $r = -.41, p < .001$ ;  $r = -.40, p < .01$ )。「自己に向ける感情の性質」は音声刺激において中程度の負の相関が見られたのに対し( $r = -.49, p < .001$ )、非音声刺激においては有意な相関は見られなかった( $r = -.02, n.s.$ )。「父親(的人物)に向ける感情の性質」は音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し( $r = -.37, p < .01$ )、非音声刺激においては弱い正の相関が見られた( $r = .29, p < .05$ )。「母親(的人物)に向ける感情の性質」は音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し( $r = -.30, p < .05$ )、非音声刺激においては有意な相関は見られなかった( $r = -.17, n.s.$ )。

次に、探索的検討に関わる指標では、「主題の性質」は音声刺激においても非音声刺激においても弱い～中程度の負の相関が見られた(順に $r = -.48, p < .001$ ;  $r = -.38, p < .01$ )。「自己の内界に向ける関心」は非音声刺激において弱い正の相関が見られ( $r = .38, p$

表5 APT評定値と対人恐怖心性の順位相関

APT指標	音声刺激	非音声刺激
他者に向ける感情の性質	-.41***	-.40**
自己に向ける感情の性質	-.49***	-.02
父親(的人物)に向ける感情の性質	-.37**	.29*
母親(的人物)に向ける感情の性質	-.30*	-.17
主題の性質	-.48***	-.38**
自己の内界に向ける関心	.19	.38**
他者に向ける関心	.12	.23
刺激外の人物の導入	.10	.16
主人公の導入	—	.01
導入人物の性質	-.25*	-.10
独特な人物設定	.31*	.14
背景音に対する情緒的意味づけの性質	-.41**	-.17
曖昧な結末	-.13	.01
結末の性質	-.21	-.23
攻撃的内容	.00	.15
損傷内容	.08	.32*

$n=63$ , \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

注:「主人公の導入」は音声刺激では出現しなかった。

$< .01$ )、「導入人物の性質」は音声刺激において弱い負の相関がみられた( $r = -.25, p < .05$ )。「人物設定の明細化」は音声刺激において弱い正の相関が見られ( $r = .31, p < .05$ )、「背景音に対する情緒的意味づけの性質」は音声刺激において中程度の負の相関が見られた( $r = -.41, p < .01$ )。「損傷内容」は非音声刺激において弱い正の相関が見られた( $r = .32, p < .05$ )。

## 4. 考察

### 仮説検討

まず、「他者に向ける感情の性質」は音声刺激と非音声刺激の両方で、対人恐怖心性との間に中程度の負の相関が認められ、仮説1は支持された。本指標は、物語における主人公以外の登場人物を脅威や不快感を与えるような否定的人物として語るほど値が低くなり、周囲に対する信頼・不信や対象関係、対人関係の質を反映すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は周囲に対して不安や怯えを感じやすく(堀井、

2006), 本指標と負の相関が見られたのは了解可能である。

次に、「自己に向ける感情の性質」は、音声刺激においては対人恐怖心性と中程度の負の相関が認められたが、非音声刺激においては有意な相関が見られず、仮説2は音声刺激の場合のみ支持された。対人恐怖心性尺度Ⅱには劣等恐怖や醜形恐怖が含まれており、その得点が高い人ほど物語の主人公の劣等感や自責感などの否定的感情に言及する人が多かったという本結果は十分に了解できよう。非音声刺激において同様の関連が見られなかったのは、非音声刺激で刺激中に複数の人物が存在することが明らかなのが第1刺激と第11刺激のみであることと関連するだろう。つまり、劣等恐怖や醜形恐怖は他者の存在によって刺激されるものであるが、非音声刺激では対人的な要素が少なく、他者との接触を回避することも可能であり、劣等感の高さが反応の中に表れにくかったと考えられる。

「父親(的人物)に向ける感情の性質」は、音声刺激では対人恐怖心性と弱い負の相関が得られたのに対し、非音声刺激では弱い正の相関が見られ、仮説3は音声刺激においてのみ支持された。本指標は父親やそれに近い人物を脅威や不快感を与えるような否定的な人物として語るほど値が低くなり、父親イメージや父子関係の質を反映すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は交流し難い両親像やアンビバレント型の愛着スタイルと関連するとされ(久保, 2000)、音声刺激における結果はこの視点から解釈することが可能であろう。また、音声刺激では第5刺激で父親が登場し、第7刺激においても男性Aが年配の上司など父親に近い人物とされることがあるのに対し、非音声刺激では刺激中に父親の存在が明確なものではなく(表1)、第16刺激において少年と父親あるいはお爺さんが導入され、夏の森の中で一緒に遊ぶという物語が比較的よく語られた。この点は物語の分類を行って確認する必要があるが、第16刺激は本研究のAPTの中でもっとも肯定的で穏やかな刺激であり(松川, 2011a)、その特徴に影響を受けた標準反応といえるかもしれない。この点についての詳細な検討は今後の課題としたい。

最後に、「母親(的人物)に向ける感情の性質」は、

音声刺激において対人恐怖心性と弱い負の相関が見られたのに対し、非音声刺激においては有意な相関が得られず、音声刺激の場合のみ仮説4は支持された。前者については、「父親(的人物)に向ける感情の性質」と同様に、母親イメージや母子関係の質の視点から了解可能である。後者については、非音声刺激では刺激中に母親の存在が明確なものではなく(表1)、第15刺激において母親が導入され、お腹の中の赤ちゃんを産んで幸せに暮らす物語が比較的よく語られた。この点もやはり物語の分類を行って詳細に検討する必要があるが、上記の物語が標準反応のようになり、本指標のマイナスの値が打ち消されてしまった可能性も考えられる。その場合は数量的分析のみでは限界があり、質的分析により検討する必要があるだろう。

### 探索的検討

以下では有意な相関が見られた指標について考察していく。

**主題の性質** 音声刺激と非音声刺激の両方で、対人恐怖心性が高いほど物語の主題が否定的であるという結果が得られた。否定的な主題には人間関係の決裂や喪失、犯罪、被害などが含まれ、本指標には参加者の対象関係の全体的な性質が反映されると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は否定的な他者および対人関係のイメージを持っているため、本指標の評定値が低まったと考えられる。

**自己の内界に向ける関心** 非音声刺激において、対人恐怖心性が高い人ほど物語の主人公の思考や内面、感情の変化の過程に言及することが多かった。非音声刺激においては刺激中の人物も少なく、葛藤的な対人場面の要素も少ないため、本指標には内向性が反映されると考えられる。他方、松下(2011)は対人恐怖心性の高い人に特有とされる認知、つまり、身体欠点認知・加害的認知・被忌避的認知と内向性の間に正の相関が見られたことを報告している。この松下の知見は女性被験者に限られたものであったが、対人恐怖心性と内省的自己意識の関連を示す研究もあり(岡田・永井, 1990)、対人恐怖心性は内向性と関連すると考えられる。この視点から、本結果も了解可能であろう。

**導入人物の性質** 音声刺激において、対人恐怖心性

が高いほど、導入人物を脅威や不快感を与えるような否定的人物として語ることが多かった。導入人物は参加者自身の想像によって登場するものであり、本指標には「他者に向ける感情の性質」よりも他者イメージや対象関係の質が色濃く反映されると考えられる。対人恐怖心性の高い人も否定的な他者および対人関係イメージを持っており、この点で本指標と一致する部分があるだろう。

**人物設定の明細化** 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、登場人物の外見や社会的属性、性格などを明細化することが多かった。本指標は自己や他者の内面（性格）および外面（外見や社会的属性）に対する関心の強さを反映しており、私的自己意識と公的自己意識の両方に関連すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人も公的自己意識と私的自己意識が強いとされており、本指標と正の関連が見られたことは了解可能と考えられる。

**背景音に対する情緒的意味づけの性質** 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、背景音（環境）を不安や不快感をもたらすものとして語ることが多かった。音声刺激においては刺激中に明確な他者が存在するため、非音声刺激に比べて背景音は周囲の環境としての側面が強く、本指標には周囲の環境に対するイメージの質が反映されると考えられる。他方、対人恐怖心性尺度Ⅱの項目には「周りには何を考えているかわからない人がいて怖い」など漠然とした周囲に対する不安を尋ねるものが含まれている。このため、対人恐怖心性の高さと本指標の低さには一致する部分があると考えられよう。

**損傷内容** 非音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、物語中の人や動物、物が傷つけられたり強い悲しみを覚えたりする内容が語られることが多かった。本指標には自己の傷つきが反映されると考えられ、対人恐怖心性が高い人の自尊心や自己評価の低さと重なるだろう。仮説2の「自己に向ける感情の性質」の検討では見られなかった関連が本指標で見られたのは、興味深い結果であった。

## まとめと今後の課題

本研究の目的は、対人恐怖心性がAPTにおける反

応の内容面にどのように表れるかを明らかにすることであった。音声刺激においてはすべての仮説が支持され、先行研究と同様の傾向を読み取ることができた。つまり、APTの中でも音声刺激の場合、対人恐怖心性が高い人の反応には、他者への被害感や不信感、自尊心や自己愛の低さ、両親に対する否定的感情が反映されていた。APTの場合は、さらに反応を質的に分析することでこれらをより深く理解することができる可能性がある。これに対して、非音声刺激において支持されたのは仮説1のみであった。逆に「自己の内界に向ける関心」と「損傷内容」は非音声刺激でのみ有意な関連が見られ、音声刺激に比べて非音声刺激が対人状況を含んでいないことから、これらは非対人状況における自己に関する特徴を反映していると考えられる。つまり、対人恐怖心性の高い人は、対人状況を提示する音声刺激と非対人状況を提示する非音声刺激とで異なる反応傾向を示し、音声刺激における反応は「関係的自己意識」を、非音声刺激における反応は「内省的自己意識」を反映している可能性が考えられる。

永井(1998)は対人恐怖心性に対する心理アセスメントを行うことによって、より適切な心理支援の方法を選択し得ることに言及している。つまり、「対人状況における行動や態度についての問題」の比重が大きい場合は、困難な状況への直面化の体験を通して問題解決に至る方法が、「関係的自己意識についての問題」では軽度 - 重度の水準を想定し、軽度の場合は集団療法的なグループでの関わりの中で、より重度の場合はクライアント - セラピストの関係性を扱う心理療法の関わりの中で自己意識の変化を促す方法が、「内省的自己意識についての問題」が強い場合は、身体的関心の高い人には自律訓練法などの方法が、内的世界に関心の高い人には自律的に内面を探求する心理療法が、それぞれ適している可能性があるという。このように適切な心理支援を選択し実践するためには、対人恐怖心性に関するきめ細かい理解に加えて、生活環境なども含む相談者の全体的な理解が必要となるだろう。学生相談において対人恐怖心性の高い相談者に対応する際にもこの点が重要であり、本研究のAPTはそのアセスメントを行う上で活用可能性があると考えられる。

今後の課題としては、まず、対人恐怖心性尺度Ⅱの5つの下位尺度とAPTの関連を検討することが挙げられる。本研究では対人恐怖心性における加害的側面がAPTにおいてどのように表れるかを検討することができなかったが、下位尺度の「加害恐怖」とAPT指標の関連を検討することによって明らかになる可能性がある。APT指標の方でも、「攻撃的内容」の他に、「主題の性質」の中に攻撃性に関する内容が含まれている可能性があり、対人恐怖心性とAPTの両面からの詳細な検討が必要であろう。また、本研究では参加者の人数が少なく、「動物の導入」や「自己体験への言及」、「刺激／物語に対する主観的印象」の検討を行うことができなかった。対人恐怖心性には性差や学年差も指摘されているため(堀井, 2014)、今後、データ数を増やしてこれらの点についても検討する必要がある。

また、対人恐怖心性の高い青年期の相談事例においてAPTを実施することにより、どのような反応が生じ、被検者のパーソナリティをどのように理解することができ、心理的支援を行う上でどのように役立てることができるのか、質的な検討を行うことも重要な課題である。その中で、本研究で得られた知見を臨床レベルで検討し直し、吟味する必要がある。このような研究を積み重ねることによって、相談場面における心理アセスメントと心理的支援の実践のさらなる充実を図ることが期待できるだろう。

## 謝辞

本研究を進めるにあたりご指導をいただきました東北大学安保英勇先生に深謝いたします。そして、本研究にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

## 注

1) 投映法は質問紙法や作業検査法と並ぶ性格検査の一種であり、一般に、新奇で曖昧で多義的な刺激を提示し、それに対する自由度の高い反応を求める手続きで実施される。被検者にとって検査の目的が明確には分からず、意識的に反応を操作することが困難であるため、質問紙法に比べて、非意識的なパーソナリティを映し出すことができるとされている。ロールシャッハ法や

TATが代表的な投映法であり、本研究で用いるAPTも投映法の1つである。

## 引用文献

- 相河和佐(2004). 女子大生の対人恐怖心性と「顔反応」 ロールシャッハ法研究, 8, 33-41.
- 相川充・藤田正美・田中健吾(2007). ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連—脆弱性モデルの再検討— 社会心理学研究, 23(1), 95-103.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*. 5th ed.
- (高橋三郎・大野裕(監訳)(2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Fenigstein, A., & Vanable, P. A. (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 129-138.
- 本城秀次・高村咲子・数田早智子・佐々木靖子・橋浩太・西出隆紀・西出弓枝(1999). 不登校症例における抑うつと登校回避感情について 厚生省「精神・神経疾患研究委託費」8公-3 乳幼児期から思春期の行動・情緒および心理的発達障害の病態と治療に関する研究 平成10年度研究報告書, pp.119-125.
- 堀井俊章・小川捷之(1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之(1997a). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 堀井俊章・小川捷之(1997b). 青年期における対人不安意識の発達の变化 心理臨床学研究, 14(4), 448-455.
- 堀井俊章(2001). 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係 山形大学紀要(教育科学), 12(4), 85-100.
- 堀井俊章(2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み— 学生相談研究, 26, 221-232.
- 堀井俊章(2013). 大学生不登校傾向尺度の開発 学生相談研究, 33, 246-258.
- 堀井俊章(2014). 大学生の不登校傾向と対人恐怖心性との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要I教育科学, 16, 135-143.
- 稲垣実果(2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, 16(1), 13-24.

- 神谷美里(2000). 対人恐怖心性とロールシャッハ反応 ロールシャッハ法研究, 4, 11-19.
- 金子一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480.
- 金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, 12 (1), 2-13.
- 木村法子 (1983). 対人恐怖についての一考察—TATに表された自己と他者を通して— 京都大学教育学部紀要, 29, 134-144.
- 久保恵 (2000). 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキングモデルの観点からの検討— 教育心理学研究, 48, 182-191.
- 益子洋人 (2009). 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連—高等学校2校の調査から— 学校メンタルヘルス, 12 (1), 69-76.
- 松川春樹 (2011a). 聴覚投映法の刺激の特徴について 臨床心理相談室紀要, 9, 33-54.
- 松川春樹 (2011b). 聴覚投映法における諸指標とパーソナリティの関連—有意味音声の聴覚刺激を用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59 (2), 123-146.
- 松川春樹 (2012). 聴覚投映法における反応の特徴について 臨床心理相談室紀要, 10, 38-64.
- 松川春樹 (2015). 聴覚投映法における形式面と認知面の指標の検討—対人恐怖心性との関連から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63 (2), 183-193.
- 松下健 (2011). 対人恐怖傾向者の確信型における3種の妄想的認知と完全主義や内向性の関連 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第1分冊, 57, 45-57.
- 向井靖子 (2001). 対人不安の生起・維持プロセスの理論モデルに関する展望—回避的行動と自己愛, 他者への関心の葛藤という観点から— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 319-326.
- 永井徹 (1998). 対人不安における心理的・認知的アセスメント 季刊精神科診断学, 9, 479-488.
- 永田法子 (1992). 対人恐怖症 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 培風館, pp.800-801.
- 岡田努・永井徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖心性との関連 心理学研究, 60 (6), 386-389.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 調優子・高橋靖恵 (2002). 青年期における対人不安意識に関する研究—自尊心, 他者評価に対する反応との関連から— 九州大学心理学研究, 3, 229-236.
- Skinner, B. F. (1936). The verbal summator and a method for the study of latent speech. *Journal of Psychology*, 2, 71-107.
- 鈴木睦夫 (1997). TATの世界—物語分析の実際 誠信書房
- 高倉佑紀子・横田正夫 (2010). 妄想様観念と対人恐怖心性・社会的スキルとの関連 日本大学心理学研究, 31, 17-21.
- 坪内順子 (1997). TATアナリシス—生きた人格診断 垣内出版
- 渡部敦子 (2003). 対人不安と自己呈示—さまざまな対人場面における自己呈示動機付けと効力感について— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 51, 187-196.